

仮設住宅の問題点

昨年3月に発生した東日本大震災から1年がたった。現在、仮設住宅（以下仮設）での生活をされている方々も多い。しかし、その仮設にはさまざまな問題点がある。今回はその問題点の一部について考えていこうと思う。

[主な問題点]

- 1 虫が大量発生する。
- 2 部屋が極端に暑かったり寒かったりする。
- 3 玄関の幅が狭いので、車いすで中に入れない。
- 4 孤立死。

など

まず、1～3の、仮設の「内部構造」に関する問題。

これには「仮設なんだから文句は言えない」という意見、「自分や他の誰のせいでもないのになぜ不便を強いられなければならないのか」という意見のどちらもある。しかしこれらは仮設を建設する時点でわかっていたはずである。

国の、仮設に対する予算の関係なのか、それとも予知不足によるものなのか、あるいはこのような現象が起こるのであることはわかった上で、住む人たちには我慢してもらおうなどということなのか…。

去年の震災は被害を受けたのが東北地方ということもあり、気温が低いので、結露がひどいという地域もあったようである。結露とくれば当然カビも発生し、部屋が汚くなってしまう。

また、断熱という視点において床のつくりが不十分で、寒すぎて眠れないという人もいたという。ちなみに、仮設は長屋で、両端の部屋と真ん中あたりの部屋では結露・断熱にかなりの差があるそうである。

さらに、車いすで部屋には入れないというのは致命的である。スロープ付きの仮設も多いが、部屋に入れられないというのでは全く話にならない。障害者の方のことをもっと考えるべきではないだろうか。

そして、4の孤立死。

これもかなり重大な問題で、特に高齢者に多い。

発見されるパターンとしては、「新聞がたまっている」、「洗濯物が干したまま、または干されないまま」、「TVや電灯がついたまま、または消えたまま」などの不審な点に近所の人が気づく、というのが多いようである。

しかし、これでは遅いのである。何らかの異変があったときに初めて気づく、というのではなく、そのような悲しい事態が起こる前から交流をもっておくことが大事だと思う。

——しかし仮設では、震災前のご近所さんたちと別れてしまい、全く見ず知らずの人と隣の部屋になったりすることもある。

そこで、「緊急通報サービス」が9月1日に仙台市で始まった。

これは、仮設住宅に一人で暮らす65歳以上の高齢者や重度障害者を孤独死から守るためのサービスである。市内全19か所の仮設住宅が対象で、既に300人以上が申し込んでいるという。

各戸に取り付けられた自動通報システムは、トイレを12時間以上使っていない状態や、火災やガス漏れなどを検知すると、警備会社や消防に通報する。携帯電話の貸し出しも行い、外出時に体調が悪化した場合なども速やかに連絡できるようにしたという。コールセンターも設置し、生活相談などに24時間体制で対応するそうだ。

さらに、石巻市でも10月から同様のサービスが始まる。

このようなサービスも始まってはいるが、一番大切なのはやはり近隣の人との「結束力」のようなものではないだろうか。

もともとのご近所さんたちとは離れ離れになってしまった方も多いが、新たなご近所さんたちとも話をする程度でもしておいたほうが良いと思う。

こういう事故が起こる前に何らかの予防策をとっておきたい。

——復興のためには、何が必要か。

復興のためには、「人々の結束力」が必要だと思う。

復興に向かって全員が一丸となれば、必ず復興できると思う。

また、他人事のように思っただけではいけない。

震災の被害が小さかった地域の人や、被害を全く受けなかった地域の人たちも、「自分には関係ない」などと思わず、手を差しのべるべきだ。

それが復興への近道だと思う。